

AI特許調査の進化：2025年から2026年へのパラダイムシフト

2025年：工程の断片的な支援から「一連の流れ」へ

検索・要約



分類



報告書作成



展示会で見られた具体的な展示内容の変化

比較する観点	2025年に確認できる内容	2026年に具体化した内容
AIが支援する工程	類似検索、要約、分類、報告書作成	調査設計、検索集合構築、設想的査読、共同レビュー
結果の説明	類似度、要約、比較表、マップ	対応する原文箇所、構成要件別の対比、手順の可視化
人材・サービス	専門サーチャーとAIの供用	AI出力を評価する技能、組織への定着支援

比較する観点	2025年に確認できる内容	2026年に具体化した内容
AIが支援する工程	類似検索、要約、分類、報告書作成	調査設計、検索集合構築、設想的査読、共同レビュー
結果の説明	類似度、要約、比較表、マップ	対応する原文箇所、構成要件別の対比、手順の可視化
人材・サービス	専門サーチャーとAIの供用	AI出力を評価する技能、組織への定着支援

個別の作業支援（検索・要約）にとどまり、断片的な活用が主流。

調査設計から共同レビューまで一連の流れを統合的に支援。

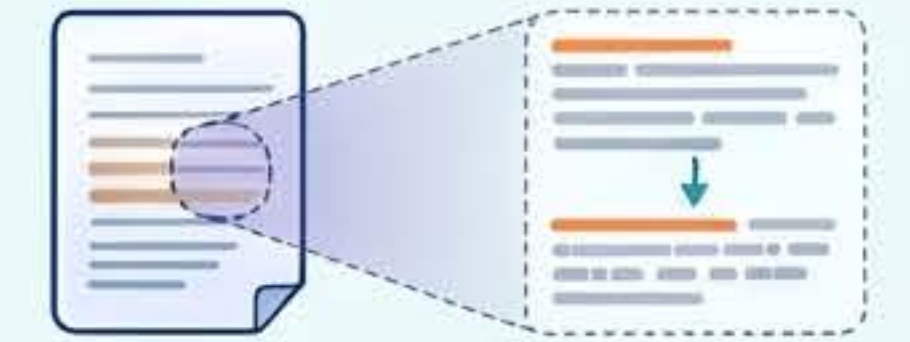
2026年：調査工程全体の統合・検証・組織共有

調査設計・検索集合構築



段階的査読・共同レビュー

「結果の提示」から「根拠と手順の可視化」へ



類似度だけでなく、原文の対応箇所や判断理由を可視化し、人間による検証を支援。

「個人の効率化」から「組織的な知の蓄積」へ



APIやMCPを通じて社内システムと連携し、チームで判断理由を共有・再利用する段階へ。

2026年の実務における新たな評価軸



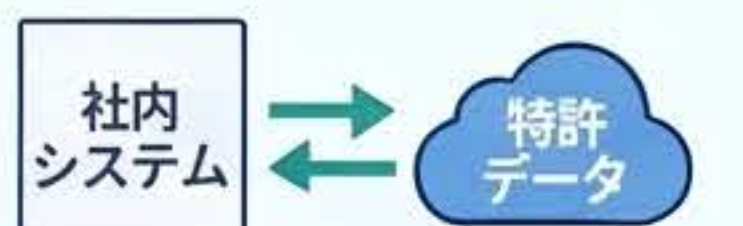
調査目的（FTO・無効審等）に応じた最適化

似た文脈を援すだけでなく、国や権利状態、権利要件の設否など目的別の処理が具体化。



網羅性と検索性の両立が不可欠に

AIの計用報道が画をもって、検索結果での「取りこぼし」がないかの検証は検閲として重要。



MCP連携による「利用場所」の自由化

会社専用図庫だけでなく、社内AI情報から遡及特許データを操作するスタイルが登場。